



## 経験者は語る

私も昔受験生だったわけだが、残念ながら現役では合格することができず、蟻人形としての生活を一年間送った。ただ、今振り返ってみると、その一年は決して無駄ではなく、有意義であったと思う。だいたい大学に合格できなかったということは、その大学で行われる講義についていくだけの基礎力がないと言われたのと同じわけだから、もう一度基礎力をつけて出直すのは当然なのである。理論的にいえば、入試の難易度が高いということは、それだけ入学後にレベルの高い講義が用意されているということである（日比谷の国数英の独自入試を考えても分かるだろう）。

私の学校も文武両道だったから、6月の国体予選までは部活（ハンドボール部）をやっていたし、1・2年のころは日比谷と同じく部活のない日は週に一日だけなので、毎日練習に明け暮れていた。よって、本格的な勉強を始めたのは夏休み前ということになる。しかも、進学重点校でもなんでもないので、受験を意識した授業があるわけでもないし、ましてや補習などもない。おまけに教育系大学の附属校だから、年に2回も教育実習生がやってくる…。

というわけで、受験勉強を開始するに当たって、数学と英語の予備校に行くことにした。数学は不得意だが英語は得意だったので、不得意を克服し、得意を伸ばそうと思ったわけである（ちなみに、国語などは取り立てて勉強するものだとは思っていなかった…笑）。見栄っ張りな私は、友だちの多くが通っているS予備校に行くことに決め、しかも、不得意な数学まで受験コースを申し込み、週に2

日ずつ一回1時間半、つまり2教科合計で6時間の予備校の授業を受けることにしたのである。今考えるとバカみたいだが、当時は自分を客観的に見る余裕はなかったのだろう。

で、学校の勉強もあるから（それも十分にこなしていたわけではない…）結局予備校の授業の予習・復習が十分に出来たわけではなく、予備校に「通っている」ことを「勉強している」と勘違いし、たまに役に立つ知識を断片的に聞いては、「さすが予備校！」と得した気分になっているという状態から抜け出せずに終わってしまった。断片的な知識は結局は役に立たないし、断片的に分かるということは、逆にいえば、そのことに関する知識をもともと自分が持っていたから反応出来たということに過ぎないわけで、結局、知っていることの確認をただけなのである。だから、不得意な分野については一向に力がかかず、結局数学については、模試の大問1の小問がいくつか解けるだけという状況から改善しなかった。何回か受験した模試も、判定結果だけに注目して、十分な復習をしていなかったから、「模試を受けた」といえる状況ではまったくなかったのである。

\*

中間考査を迎えたが、塾や予備校を負担に感じているなら、もう一度、自分の勉強を振り返ってみることである。また、目的に合った（レベルに合った）講座かどうか再確認してみよう。うまく活用しないと、結局は足を引っ張るのが塾・予備校である…と経験者は語るのであった。